

5B-01 日本における子どものための科学教育施設の現状と その考察

八並 勝正^A 地引 牧子^B 鈴木 晴美^B
 YATSUNAMI Katsumasa JIBIKI Makiko SUZUKI Harumi
 ○高田三容子^B 藤枝 弓子^B 和田 英子^B
 TAKADA Miyoko FUJIEDA Yumiko WADA Eiko
 A 玉川大学文学部 B 玉川大学文学部芸術学科(学生)
 体験学習、創造性、子どもの科学教育、科学館、博物館

1. 研究の目的

1957年のスパートショックに端を発したアメリカの科学教育改革運動の進展と共に、アメリカでは『体験学習』が重視され、子どものための博物館である Children's Museum の役割も大きくなり、今日では"Hands On"という言葉も一般的になってきている。

また、このような背景のもとに、アメリカにおいてはChildren's Museum が多数建設され、1988年現在のデータによると、アメリカではChildren's Museum と称する館だけでも130に達し、現在でも多数の館が建設されつつある。

わが国でも、近年『子ども科学館』と称する Children's Museum が多数建設され、今後も多数のミュージアムが建設されていくものと考えられる。また、これらの施設の拡充によって、学校5日制への対応をはかろうとする方向にもある。

本研究は、現在、発展途上の段階にある『子どものための科学施設』の実態を調査し、そののぞましいあり方や方向性を検討することを目的としたものである。

2. 研究の方法及びその内容

わが国の関東、中部、近畿地方に設置されている『子どものための科学施設』と思われる施設を約180館ほど選び、それらの施設の資料を収集し、さらに『全国博物館総覧』等の資料等も参考にして文献調査を行った。

次に、これらの施設の各々について現地調査に出かけ、施設の職員からその館の状況を聞き、さらに来館者にたいして面接法により子ども科学館に関する意見や感想を聴取した。また、利用者にたいして、質問紙法により来館者の意識調査も実施した。

今回の発表では、全体の概要とともに、これらの科学館の中で特に次の国・公立科学館を中心にして述べたい。

- | | |
|---------------|---------------|
| 1. 栃木子ども総合科学館 | 2. 国立科学博物館 |
| 3. 横浜こども科学館 | 4. 浜松市立科学館 |
| 5. 名古屋市科学館 | 6. 神戸市立青少年科学館 |

3. 結果と考察

図1

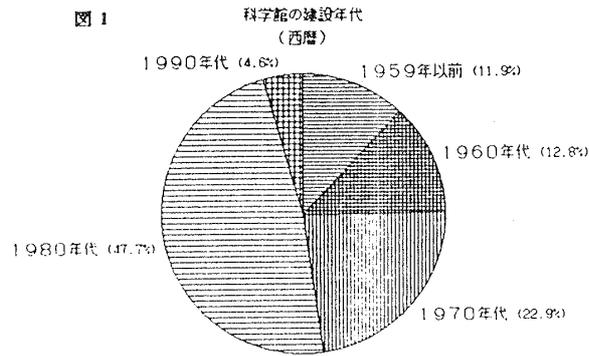


図2

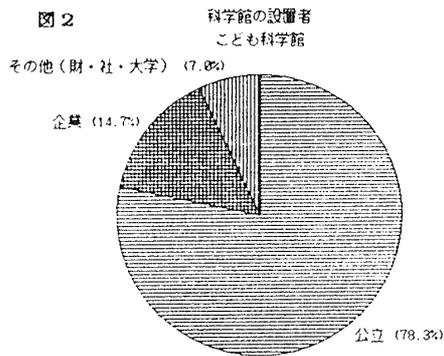


図5

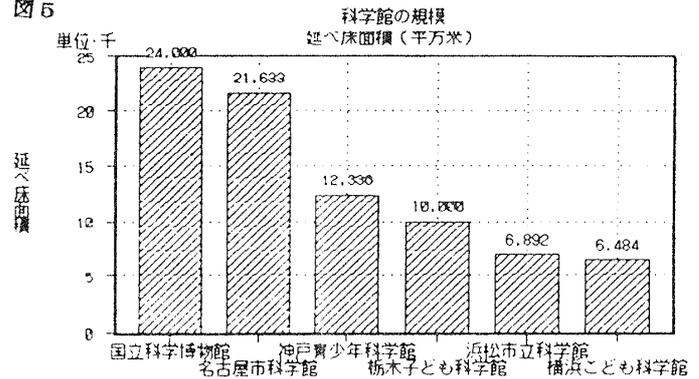


図3

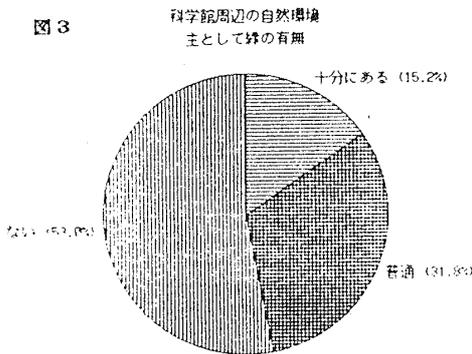


図6

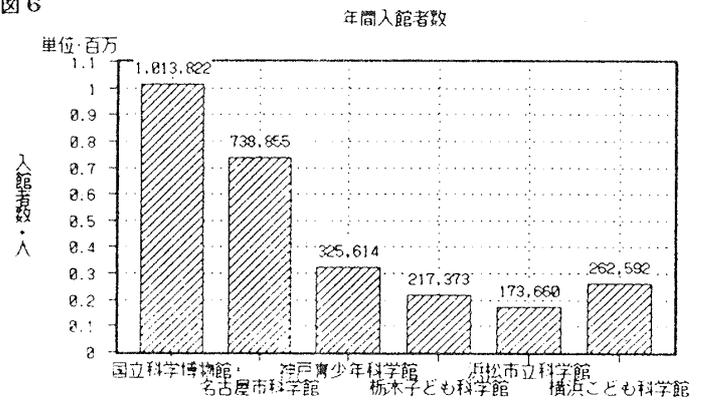


図4

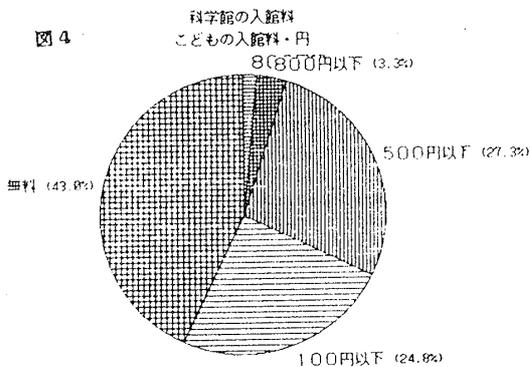


図7

